

**Contents** \*\*\*\*\*

特集：バイデン次期政権、苦難の助走	1p
<”The Cook Political Report”から>	
”Centurism or bust in the 117 <sup>th</sup> Congress” 「次期 117 議会は中道か死か」	7p
<From the Editor> 2021 年の始まり	8p

\*\*\*\*\*

**特集：バイデン次期政権、苦難の助走**

2021 年の最初の 1 週間は、「日本は緊急事態宣言、米国は首都が非常事態」というとんでもない始まりとなりました。本号では米国政治の方を取り上げますが、1 月 20 日に船出するはずのバイデン政権にとっては、苦渋に満ちた助走期間ということになります。いや、まさか米国議会に暴徒が乱入する場面を見ることになろうとは。死傷者も出てしまい、米国民主主義の歴史における痛恨の 1 ページということになりました。

問題は今後のバイデン政権の行方です。今週行われたジョージア州上院決選投票では、民主党が望外の「2 勝 0 敗」となり、「疑似トリプルブルー」に手が届きそうです。とはいえ、「50 対 50」の上院運営はけっして楽なことではないでしょう。今週 1 週間の経緯を振り返りつつ、バイデン次期政権の前途を考えてみました。

**●今年の”The Top Risk”にされたバイデン氏 (1/4)**

毎年恒例、ユーラシアグループの”Top Risks 2021”は、今年 1 月 4 日（月）に公表された<sup>1</sup>。2021 年のラインナップは以下の通りである。

1. 46\* （第 46 代バイデン大統領）
2. Long Covid （長引く新型コロナ）
3. Climate: net zero meets G-Zero （排出ゼロも世界は G ゼロ）
4. US-China tensions broaden （米中関係の緊張広がる）
5. Global data reckoning （グローバルデータの落日）
6. Cyber tipping point （サイバーの転換点）

<sup>1</sup> <https://www.eurasiagroup.net/files/upload/top-risks-2021-full-report.pdf>

7. (Out in the) cold Turkey (冷え込むトルコ)
8. Middle East: low oil takes a toll (中東：低い油価は犠牲を伴う)
9. Europe after Merkel (メルケルなき後の欧州)
10. Latin America disappoints (ラ米の失望)

リスクもどき：トランプのお友達は窮地に？ 米テック企業への反発、米イラン関係

冒頭の「46\*」がいつもながらお見事である。「46」は合衆国第46代大統領のことを指しているのだが、それには「\*」（アスタリスク）がついている。いわか「注釈つき」であって、「ホワイトハウスの新たな主は、米国民の半分近くから不法な存在と見られている」ことを指している。もちろんご当人のバイデン氏は、そんなことは百も承知であろう。

そもそもトランプ政権に対し、イアン・ブレマー氏の読みは何度も外れてきた。2016年のTop Risksでは、「米国有権者はイスラム教徒に国を閉ざすような指導者を選出しない」と言っていたし、2017年は「トランプ政権が発足しても、国内政策は議会が睨みを効かすだろう」、2018年も「中間選挙で大敗するかもしれない」などと言っていた。要するに3年連続で、トランプ氏は Red herrings (リスクもどき) 扱いだった。

それが昨年のTop Risksでは、第1位がRigged!: Who governs the US? (米大統領選の不正)ということになった。トランプ人気がこれだけ続くと、メディア情報などに一切耳を傾けない支持者ができてしまい、彼らは選挙システム自体を疑うようになってしまう。これでは民主主義が機能しなくなる。その結果がどうなるかといえば、今週のワシントンではあわやクーデター寸前という姿をさらけ出してしまった。

今年の第1位「46\*」は、そうなった理由として以下のような認識を示している。

民主党は日に日に大学教育を受けた都市住民の連合体となりつつあり、トランプ人気の広がりが彼らにとっての挑戦となっている。彼は2016年選挙に比して1100万票も多く獲得しており、ヒスパニックや黒人も含めて、今までより広い層に浸透している。その多くはトランプが敗北を認めないことは勇気の印であって、民主主義への冒涇ではないと見なしている。

共和党の多くの長老たちはトランプを嫌っているが、彼は最も人気と影響力がある共和党の大物として政界を去ろうとしている。選挙認証を土壇場で延期、または脱線させようとする議員たちのプッシュは、これから起こることの前兆となるだろう。トランプ支持者のかなりの部分が忠誠であり続ける限り、彼は共和党の指導者への影響力を維持するだろう。彼らにとって、バイデンは#NotMyPresidentであり、違法と見なされる。

個人的には、今回の1月6日の混乱はこれまで続いてきた「トランプ劇場」の掉尾を飾るフィナーレであって欲しい。ただし、間もなくホワイトハウスを去る大統領としては、トランプ氏が異常なほどの熱気を維持していることも否定しがたい事実であろう。



## ●GA 州決戦は望外の「民主 2 勝 0 敗」に (1/5)

1 月 5 日 (火) は注目のジョージア州上院決選投票であった。昨年からずっと言われ続けてきた通り、①民主党の 2 勝 0 敗、②民主党 1 勝&共和党 1 勝、③共和党の 2 勝 0 敗という 3 通りの可能性があった。



普通に考えれば 2 つの選挙の現職はいずれも共和党であり、ジョージア州は南部のレッドステーツということになっている。2020 年選挙でバイデン氏が僅差でトランプ氏を破ったとはいえ、地方選挙には国政とは違う別のロジックが働く。「反トランプ票」に期待することも難しい。ゆえに確率は低いけれども、「2 勝 0 敗なら上院が 50 対 50 になる」(上院が事実上の民主党支配となる!) ということで、民主党側は莫大な選挙資金を投入していた。

2 つの選挙がいかに接戦であったかは以下の通り。どちらも 1% 程度の差しかない。

## ○Georgia Senate Runoff Election Results (The New York Times)

WINNER ✓ Jon Ossoff, Democrat, wins the Senate runoff election in Georgia. Race called by The Associated Press.				
Updated 5:40 PM ET		98% REPORTED		
Candidate	Party	Votes	Pct.	
 Jon Ossoff ✓	Democrat	2,247,312	50.46%	
 David Perdue*	Republican	2,206,009	49.54	
Total reported		4,453,321		

WINNER ✓ Raphael Warnock, Democrat, wins the Senate special runoff election in Georgia. Race called by The Associated Press.				
Updated 5:40 PM ET		98% REPORTED		
Candidate	Party	Votes	Pct.	
 Raphael Warnock ✓	Democrat	2,266,333	50.9%	
 Kelly Loeffler*	Republican	2,187,042	49.1	
Total reported		4,453,375		

民主党側からすれば「望外の勝利」だが、共和党側から見れば限りなく「トランプ大統領によるオウンゴール」である。

まず昨年末に追加コロナ対策が議会で可決された際に、大統領が「給付金は 1 人 600 ドルではなく、2000 ドルであるべき」とサインを渋ったことである。元より民主党側は給付金の増額には賛成である。下院民主党は急きょ「2000 ドルの追加配布」法案を可決する。それを財政規律を重んじる上院共和党が蹴飛ばして、元通り給付金は 600 ドルということになり、政府閉鎖を恐れたトランプ氏が土壇場でサインをして追加対策は成立した。

この結果、民主党側は GA 州選挙において「民主党が勝てば、1 人 2000 ドルの給付金が出ます」というアピールができるようになった。これは政党としても有権者としても、文字通り「おいしい話」であっただろう。

さらにひどかったのは、投票日の直前になってトランプ氏が GA 州の選挙事務を統括する州務長官に対し、票の再集計を通じて自身の敗北を覆すよう電話で圧力をかけていたことが報じられた。約 1 時間の電話内容はそのままネット上で公開されており、トランプ氏は選挙で不正があったとの説を繰り返し、「私が望むのは(バイデン氏との差である)1 万 1780 票を見つけることだけだ」と言っている。大統領の応援演説が、2 人の上院議員候補にプラスに働いたかどうかは大いに疑わしい。

議会共和党としては、この結果を受けて上院における多数党の地位を失い、ミッチ・マコーネル院内総務は”Majority Leader”から”Minority Leader”に転落してしまう。「まったく余計なことをしやがって…」というのが執行部の受け止め方であろう。

しかし今回のワシントンの騒動を見ても、大統領の動員力はいささかも衰えてはおらず、共和党が限りなく「トランプ私党」になっている現状では、個々の議員の受け止め方はやや違う。2年後の中間選挙を意識する下院議員の中には、「トランプ命」の人も少なくなさそうだ。親トランプか、脱トランプか。共和党内の亀裂は深い。

### ●意外と難しい 50-50 の政局運営 (1/5)

さて、「上院の議席数が 50 対 50 になると、議長役を務める副大統領の 1 票がモノを言うので民主党が優位になる」というところまではよく知られている。”Majority Leader”（多数党院内総務）も政権党側となる。しかしそれ以外のルールはどうなるのだろうか？

上院がぴったり同数になったことは、過去には 1881 年にもあったし、近年では 2001 年のブッシュ Jr. (GWB) 大統領の政権発足時がそうであった。19 世紀の事例はさておいて、この 2001 年当時の米議会のことを何と 20 年前の本誌が取り上げている。タイトルは「ジェフオーズ上院議員の議」。ブッシュ Jr. 政権があまりにも保守路線なので、穏健派のジム・ジェフオーズ上院議員が反発して離党してしまう。かくして「50 対 50」の均衡は短命に終わるのであるが、当時の経緯は以下のような次第であった。

両党の院内総務は権力の分担方法について協議し、1 月 5 日には「ロット・ダッシュル合意」が成立した。上院内の委員会運営は従来通り共和党が独占する。つまり委員長ポストはすべて共和党が取る。ただしすべての委員会で配属議員数を共和、民主で半数ずつとする。スタッフ採用予算も折半し、採用人数も同数。そしてここが重要なところだが、「議員の辞任や死亡により、50 対 50 の均衡が崩れたら、自動的に既存の上院規則を適用する」というものである。

一見、民主党が損をするように見えるが、共和党の現職上院議員には病状が悪化しているヘルムズ議員、98 歳という高齢のサーモンド議員がいる。この 2 人が死亡ないし引退すると、どちらの選挙区も州知事は民主党なので、代役になる上院議員は民主党になる。その時点で与野党の均衡は逆転する。民主党としては「先憂後楽」を狙った妥協策だった。

案の定、2 月 2 日にサーモンド議員は「過労のため」入院する。このときは 4 日に退院して事無きを得たが、「100 歳まで議員を続ける」という同議員の元気がいつまで続くかは神のみぞ知る。共和党にとっては、上院で時限爆弾を抱えているようなものである。

ところが両人が無事であるにもかかわらず、4 月 24 日、ジェフオーズ議員が共和党からの離脱を宣言した。これにより議会内勢力は民主 50、共和 49、独立 1 となった。民主党には思ったより早い「棚からぼた餅」となった。これで上院指導者 (Majority Leader) の座は、共和党のロット上院議員から民主党のダッシュル上院議員に移る。そして委員長職は全部民主党が取る。与野党は逆転し、1994 年以来続いてきた共和党による上院支配が終了した。

いや、まことに懐かしい。「9/11」同時多発テロ事件以前のブッシュ Jr.政権がどんな感じであったかは、多くの方には忘却の彼方であろう。「フロリダ再集計」を乗り越えて勝利したブッシュ Jr.大統領は、まず 10 年間で 1.35 兆ドルの大型減税を成立させ、京都議定書から離脱を宣言し、ミサイル防衛開発を推進した。

これに対し、ヴァーモント州選出のジェフォーズ議員が叛旗を翻した。共和党を離党して無所属に転じたのである。余談ながら、2006 年選挙で引退したジェフォーズ議員の後釜として、同じく無所属で当選したのが現在のバーニー・サンダースである。

さて、今回も同様な状況が揃ったので、委員長ポストや予算配分などを巡ってはシューマーとマコーネル両院内総務の間で同様な妥協が図られるはずである。とはいえ、50 対 50 という異常な状態は、長くは続けられないと受け止めるべきだろう。議員の死亡、辞職、離党など、さまざまなケースがあり得るので、この状態が 2 年後の中間選挙までずっと続くとは考えない方が良さそうだ。

ジェフォーズ議員が嘆いている通り、20 世紀までの米議会ではまだ党派色が薄く、議員が党の方針に逆らうことはざらにあった。それが現在では、二大政党がいずれも身内をガチガチに固めあっている。共和党側は、ウェストヴァージニア州のジョー・マンチン上院議員あたりを狙い目とするだろう。石炭産出州の穏健派議員であり、共和党の路線に近いことが多いからだ。逆に民主党側は、ミット・ロムニーやスーザン・コリンズに対して働きかけるだろう。「50 対 50」の上院では「たった 1 人」の存在が大きくなるのである。

今週 1 月 3 日から始まった第 117 議会については、政治アナリストのチャーリー・クックの分析が興味深いので本号の P7 に抄訳を掲載しておいた。バイデン政権は、上院共和党との間で妥協を目指すべきであり、議会は「誰も愛してはくれないが、多くの人に受諾可能なもの」を生み出していくほかはない、という。

今週の民主党は、GA 州選挙により「疑似トリプルブルー」の実現に沸いた。しかるにその実態は、①高齢過ぎて、2 期目があるとは思われない大統領、②50 対 50 でいつ均衡が崩れるかわからない上院、③わずか 10 議席差で戦後最小差の下院、という「薄い 3 つのブルー」なのである。仮に 2 年後の中間選挙で敗れるようなら、バイデン氏はそこでレイムダック化するだろう。前途は山あり谷あり、と考えなければならない。

## ●議会の選挙人投票確認が大荒れに (1/6)

GA 州決選投票の翌日は、議会が選挙人投票を確認するという単なるセレモニーの一日となるはずであった。ところが大統領自身によって扇動されたトランプ支持者が、連邦議事堂内に乱入して大変な一日となってしまった。

昨日の筆者は終日、ワシントン発のニュースにくぎ付けになっていた。お陰で睡眠不足であり、今日になっても変なシーンが目の前にちらついている。ということで、以下は少々、変な文章となることをお許しいただきたい。

なぜかバイキングの装束をした闖入者。ペローシ下院議長の執務室を占拠してくつろぐ暴徒。マティス元国防長官の厳しい叱責のツイート。痛ましい4人の死者。そして南北戦争の最中も、けっしてワシントンには入らなかったはずの「南部連合」の Confederate Flag。いずれも「ありえない」シーンばかりである。

暴徒が排除されて、ようやく州ごとの承認作業が再開される。Aで始まって、いきなりアリゾナ (Arizona) で異議申し立てを受け、審議は中断される。反対意見を聞かされて、最後は投票で粛々と否決。親トランプ派議員としては、「私はちゃんと反対しました」というアリバイ作りなのであろう。議長役のペンス副大統領は無表情に作業を進めていく。4年間にわたって大統領に忠誠を尽くしたペンス氏は、最後は議会人としての筋を通した。

その後、ジョージア (Georgia) やミシガン (Michigan) は「上院の反対がない」ということでスルーされるのだが、ペンシルベニア (Pennsylvania) で再び中断に。結局、バイデン氏が大統領に承認されたのは午前3時40分であった<sup>2</sup>。イアン・ブレマー氏による「46\*」(注釈付き第46代大統領) という予言は、まことに言い得て妙なものであった。

以下は勝手な想像になるが、1月6日にキャピタルヒルに突入したトランプ支持者たちは、たぶん大卒以上の人たちはほとんど居なかつただろう。彼らは政治的に「忘れられた人々」であって、トランプ氏の嗅覚によって発見された。

かつての米国であれば、ブルーカラーでも家が買え、子どもを大学にやることができた。たとえ”Poor White”と呼ばれる人たちであっても、暮らしぶりはけっして”Poor”ではなかつたし、ましてや”Miserable”ではなかつたのである。

ところがいつしか高等教育を受けて、学位や資格を取って、できれば偉い人とのコネも作らないと、所得が伸びない世の中になってしまった。人種やジェンダー、年齢による差別はご法度の米国でも、教育格差は「能力主義」と呼ばれ、むしろ推奨される。おカネがないから進学できない、という人にはまだほかに方法がある。そもそも勉強するつもりがない人たちはどうなるのか。そっちの方がきつとはるかに多いはずなのである。

浮かび上がるチャンスをなくした人々に対して、唯一、彼らにもわかる言葉で語りかけたのが、ドナルド・トランプだったのではなかつたか。彼らの目から見れば、「日に日に大学教育を受けた都市住民の連合体になりつつある民主党」は、自分たちのことを見下げる鼻持ちならない連中ということになる。怒りは醒めるけれども、恨みは長引くものだ。

過去4年間、彼らから見てエスタブリッシュメントを右往左往させるトランプ大統領の言動は、さぞかし胸のすく思いがしただろう。バイデン次期大統領は、彼らを再び民主党の支持層として取り込まねばならない。そこで最近の民主党内では、「ミドルクラスのための外交」がキーワードになっているらしい。ただしそんな「上から目線」は、むしろ彼らの反発を買うのが落ちではないか。バイデン氏自身は気のいいおじいちゃんだが、その周辺を固めているのは恐るべき高学歴集団なのだから。

---

<sup>2</sup> 1992年のPKO国会における「牛歩戦術」をまざまざと思い出してしまった。

## <”The Cook Political Report”から>

”Centulism or bust in the 117<sup>th</sup> congress”

「中道か死か？次期 117 議会」

Charlie Cook

December 23<sup>rd</sup> 2020

**\*選挙予測のプロ、チャーリー・クック氏が予測する次期米国議会の動向。上院も下院もギリギリの差となって、バイデン政権は文字通り綱渡りということになりそうです。**

<抄訳>

約 1 か月前、当コラムは次期 117 議会はバイデン政権とともに、ワシントンにおける生産的かつ実り多い時代を可能にするかと予測した。1 月 5 日のジョージア州決選投票まで、どちらが上院の多数を握るかは不明だが、イデオロギー色の強いいかなる法案も、両院を通して大統領のサインを得て、法案になる可能性はゼロであることが明らかになっている。

下院では最低 3 人がバイデン政権入りし、民主党の空席ができて議席差はますます減る。ペロシ下院議長は、一時的にせよ 219 もしくは 220 議席で多数を維持するだろう。進歩的な法案が下院を通るとは思えない。上院も同様で、共和党が 52 議席でも、50 対 50 でカマラ・ハリスの 1 票で決まるにせよ、左右に偏った法案が上院で通ると見る者はいない。

つまりは 2 つに 1 つ。何も通らないか、それとも中道でコンセンサスを作るかである。現在のコロナ救済対策は、議会内に超党派で同数の「問題解決者コーカス」において、民主党のジョシュ・ゴットハイマー及び共和党のトム・リード議員の共同議長で扱われている。誰も愛してはくれないが、多くの人に受諾可能なものを作るのが立法府の仕事である。それは今後の議会のモデルとなるだろうし、今日の米国政治においてはそれ以外に望みはない。

前 ABC ニュースのマーク・ハルペリン曰く。「ジョージアの決選投票を抜きにして、来年ワシントンで 2 番目の重要人物となるのはミッチ・マコーネルだ。バイデン政権の人事から法案審議、政権全体の政治的可能性までもが、同氏の希望や計算次第ということになる」。

マコーネルは民主党とリベラル派がトランプの次に嫌う相手であるが、彼の政治手腕はまるでド素人の挑戦を受けているチェスのグランドマスターのようだ。最近の彼のプレイについて、CNN のスティーブン・コリンソンはこう評している。「11 月の選挙後、バイデン当選を認めるまでかくも長く待ったことで、マコーネルはトランプ支持の上院議員たちが良からぬ動きをするのを食い止める十分な政治的資本を構築したように見える」。

今は変に楽観的になっている人が少なくない。過去 140 年間の米国政治のいかなる期間よりも党派的になったこの 5 年間の後で、星の並びが少しだけ良くなった。熱を冷まし、しばし両極端を大人しくさせるチャンスが出てきた。党派的にならなくてもよい政治課題について、現実的で小さなステップを踏むことができる。パンデミックが証明したように、何でも党派的にはできるが、あらゆる問題に火を点ける必要はないのである。

ジョー・バイデンとミッチ・マコーネル以上に、このことを熟知している者は居ない。この 2 人の古株は、ともに仕事をすることができるかもしれない。

## <From the Editor> 2021年の始まり

明けましておめでとうございます。今年はいいいニュースと悪いニュースが1つずつありますね。グッドニュースは、災厄の年である2020年がついに終わったということ。そしてバッドニュースは、2021年はそれよりも悪いかもしれないということでもあります。

——てなことを、今年の新春講演会のつかみジョークにしよう、などと考えておりましたら、いきなり昨日付で1都3県に緊急事態宣言が発出されました。お陰で1月に予定されていた筆者の講演会は、続々と中止や延期になっています。感染者数の増加が止まらない現状では致し方ありませんが、お詫びの電話を受けるたびに脱力しております。まあ、これは昨年も体験したこと。2021年の序盤はとりあえず低姿勢で参りましょう。

年末年始は、どこにも出かけない「静かな正月」となりました。「箱根駅伝」はスタートからゴールまで見ましたし、TV東京『孤独のグルメ』は大晦日の新作も、再放送も見ました。これからは外食の機会も減るかもしれませんが、井之頭五郎氏に倣って一人で食べる分には感染リスクは低いはず。そのうち「Go To キャンペーン」ならぬ「Go Ro キャンペーン」を試み、個人的に外食産業を支援したいと考えております。

この年末年始の収穫と言えば、ツイッターを始めたことくらいです。今まではトランプさんのツイートを受けるだけだったのですが、去年、還暦を機に「何か新しいことを始めてみよう」と思い立ちました。かんべえさん (@tameikekanbei) という名前で、ちょうどフォロワー数が2000人弱まで増えたところでした。ちょっと受けるようなネタを提供すると、リツイートや「いいね」が増えるからよくスマホが振動します。「なるほど、これがバズるといふことなのか」などと面白がっています。

もっともこのSNSが世の中を変な方向に引っ張っていることは、トランプさんの事例を見ても明らかなわけですし、深入りは厳禁であります。というか、バイデン政権は是非、プラットフォーム企業に対する制限を打ち出してほしいものだと思います。

などと繰り返すか愚痴だかわからないような新年のご挨拶です。幸いにも当方は風邪ひとつ引かず、健康に過ごしております。夜の付き合いが減って体重は久々に70キロ割れし、成人病検診の数値も改善しております。Covid-19とは無縁の1年としたいものです。

どうぞ本年もよろしくお付き合いください。

\* 次号は1月22日（金）にお送りします。

編集者敬白

---

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: [yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com)